

# 上市町埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ

1988年度

上市町教育委員会

1989年3月

## 序

靈峰劍の麓に広がる上市町は、古くから人々の生活の場として、数多くの文化遺産を育みそだててきた所です。今から約2万5千年前の眼目新丸山遺跡、縄文時代の極楽寺遺跡、弥生時代の江上遺跡などがその歴史を如実に物語っています。祖先が苦難に耐えて、人生を開拓し、懸命に生きてきた中に、激変する今日にも通用し、来たるべき21世紀にも価値を持つに違いない業績と「生き方の哲学」を学ぶことができるのです。

ところが、近年、押し寄せる開発の波の中でこれらの貴重な文化遺産が失なわれようとしています。

町ではこの事態を重視し、次代を背負う人々にもこのすばらしい恩恵が受けられるよう文化遺産を継承することが、今に生きるもののが務であるとの考え方から、そのための基礎資料を充実することにいたしました。本書がより多くの方に利用され文化財保護の一助となることを願ってやみません。

最後に、調査の実施、報告書の作成にあたり、御協力いただいた地元の方々、また御援助をいただいた富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、富山大学人文学部考古学研究室をはじめとする関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

上市町教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、<sup>かみいちまち</sup>上市町教育委員会が国庫補助事業として実施した遺跡詳細分布調査の初年度（1988年度）の報告書である。
- 2 調査は、富山県埋蔵文化財センター、富山大学考古学研究室の指導と協力を得て上市町教育委員会が実施した。
- 3 調査事務・現地調査は生涯学習課主事高慶孝が担当し、生涯学習課長荒川武夫が総括した。
- 4 遺物の整理、本書の編集・執筆は、調査担当者が行った。
- 5 調査参加者は次のとおり  
(現地調査補助員) 山崎典子・押川恵子・境洋子・春日真実・山本慎子・高村幸江・安英樹・瀬戸智子・藤井由美子・柿田祐司・越前慶祐・亀井聰・笛川修一・沢辺利明・長谷川健一・清水孝之、以上富山大学人文学部考古学教室学生  
(遺物整理) 安英樹・田中栄子・松井あき子
- 6 本書の作成にあたっては、富山県埋蔵文化財センター狩野睦・山本雅敏・齊藤隆・酒井重洋・橋本正春の各氏と富山大学人文学部教授秋山進午・同助教授宇野隆夫氏をはじめとする方々から多大の御協力と貴重な御教示を受けた。深く感謝して御礼申し上げる次第である。

## 目 次

第1章 はじめに .....	1
1 調査の目的 .....	1
2 調査の経過 .....	1
3 上市町の地勢と自然 .....	2
第2章 分布調査の成果 .....	3
1 遺跡と採集遺物 .....	3
(1) 砂林開北遺跡 .....	3
(2) 砂林開遺跡 .....	4
(3) 野島遺跡 .....	4
(4) 永代遺跡 .....	6
(5) 野島大門遺跡 .....	7
(6) 永代野遺跡 .....	8
(7) 片地堀場遺跡 .....	8
(8) 松原野遺跡 .....	9
(9) 片地遺跡 .....	9
(10) 黒川古墳 .....	9
(11) 松原野新遺跡 .....	9
(12) 稲村山城跡 .....	10
(13) 折戸遺跡 .....	10
(14) 中村横穴群 .....	10
(15) 千石山城跡 .....	10
(16) その他 .....	11
参考文献 .....	11
挿 図 第1図 地域区分図 .....	2

## 図版目次

- 図版1 調査地区現況写真(1)
- 図版2 // (2)
- 図版3 遺物実測図(1) 繩文土器・石器、陶器
- 図版4 // (2) 繩文土器・石器、須恵器、陶器
- 図版5 // (3) 繩文土器
- 図版6 // (4) 繩文土器・石器
- 図版7 // (5) 繩文石器
- 図版8 // (6) 繩文土器・石器、弥生土器、陶磁器
- 図版9 // (7) 繩文土器、須恵器、陶磁器
- 図版10 // (8) 繩文土器、須恵器、陶磁器
- 図版11 遺物写真(1) 繩文土器・石器、陶器
- 図版12 // (2) 繩文土器・石器、須恵器、陶器
- 図版13 // (3) 繩文土器
- 図版14 // (4) 繩文土器・石器
- 図版15 // (5) 繩文石器
- 図版16 // (6) 繩文土器・石器、弥生土器、陶磁器
- 図版17 // (7) 繩文土器、須恵器、陶磁器
- 図版18 // (8) 繩文土器、須恵器、陶磁器
- 図版19 遺跡分布図(1)
- 図版20 // (2)

# 第1章 はじめに

## 1 調査の目的

上市町に人の営みが始じまったのは、現在知られている限りでは、今から約2万5千年前、上市川左岸の河岸段丘、眼目新丸山においてである。以後、IH石器（先土器）・縄文時代は、この上市川左右両岸の段丘上、弥生時代は、上市川により形成された扇状地、古墳時代以降は町の平野部全域というように、時代により生活の場は変化するが、現在に至るまで連続として人々の営みが続いている。

したがって遺跡の数も多く、1972年（昭和47年）の『富山県遺跡地図』においては41箇所の遺跡が登録されている。そして、江上遺跡に代表されるように、その後新たに発見された遺跡も多く、未発見、未登録の遺跡も少なからず存在するものと考えられる。

ところが、近年の開発行為の増加に伴ない、遺跡の保護と開発との調整が社会問題化しており、こうした中で人知れぬうちに消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような中にあって、上市町教育委員会は、郷土の歴史と文化を守り育てるため、また保護と開発との調整のための基礎資料として、遺跡台帳、遺跡地図の整備充実が急務であると考えたのである。

## 2 調査の経過

以上から、上市町教育委員会では、国庫補助金を得て遺跡詳細分布調査を行うこととした。今回の調査はその初年度に当たる。

調査対象は、山岳地帯と一部山地を除く全町域をI～V地区に区分し、5箇年を目途に遺跡の所在確認及び遺物の採集を行うこととした。

今回の調査地区は、町の東側を流れる早月川流域（通称早月谷）と町の中央部を流れる上市川右岸の台地及び丘陵部分である（第1図I）。この地区は、大型リゾート計画が立案されている地区であり、遺跡保護上、早急に遺跡の有無、規模、性格を把握する必要性があった。調査の実施にあたっては、便宜上、上市川右岸の台地と、早月川流域との2地区に区分し、さらに、各地区を村落や水田区画等により、十数箇所の小地域に分けて、対象地域の目安とした。ただし、今年度調査地区は、山間部がかなり多く、分け入ることが難困な地域が多く、調査は将来に委ねた。

調査時に持参する地図は5千分の1の国上基本図とし、遺物密度の高い場所以外では、原則として1点ごとに地点を記入することとした。

調査期間は1988年10月3日から25日の計12日間、延87人の参加を得て実施した。遺物の整理、実測、写真撮影、報告書の作成は1989年1月から3月にかけて行った。

調査にあたっては、富山大学考古学研究室の協力を得、現地調査の補助員として多くの方々に参加いただいた。記して謝意としたい。

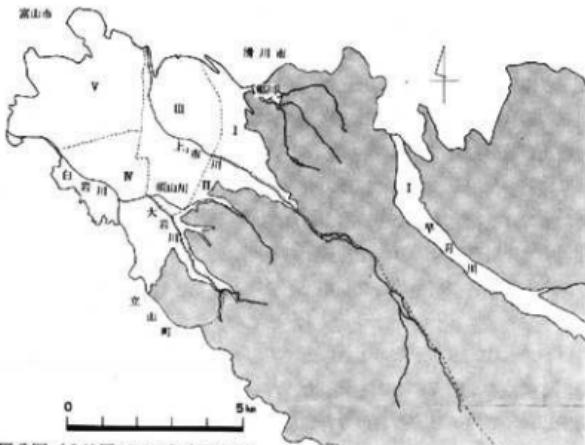
### 3 上市町の地勢と自然

上市町は、富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する早月川、上市川、白岩川にそつて東南から北西に細長く延びた町である。西は県の中心である富山市に、東は標高2998mの剱岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。町域は東西約26km、南北約16km、面積約237km<sup>2</sup>を測る。

地形は実に変化に富んでいる。東部は山岳地帯で、そこをぬうように早月川が流れしており、流域に独特の自然景観をあたえている。西部は、上市川、白岩川によって形成された扇状地が広がり、緑の田園地帯を形づくっている。富山湾岸までの距離は約10kmである。扇状地の扇側部付近は、隆起によってできた河岸段丘が東西に延び、山地との境にまで続く、こうした地形の背後に丘陵があり、剱岳をはじめとする山岳地帯へと続く。これが北アルプス立山連峰で、氷河地形の圓谷（カール）や、火山地形が隨所に見られる。町の最高地点、剱岳と最低位の上市川の扇端部までは約26kmで、比高差約2950mを測る。

このように、上市町は、東西の比高差が非常に大きいため、照葉樹林、落葉樹林、針葉樹林、低木林とゆうように多様な植物分布を示し、それに伴う複雑な動物相も存在している。

今回の調査は、早月川流域と上市川の河岸段丘及び丘陵部分である。これらの地域は、古くより人々の居住に適していたらしく、縄文時代の野島遺跡・永代遺跡・野島大門遺跡などがあり、豊かな自然環境を物語っている。



第1図 地区分図（I地区が1988年度調査区）

## 第2章 分布調査の成果

1988年度調査によって整理箱4箱分の資料を採集した。遺物総数は1244片で、40個体余りの土器・石器を確認した。以下遺跡ごとに説明を行う。

### 1 遺跡と採集遺物（図版1～20）

#### (1) 砂林開北遺跡（図版19の1）上市町砂林開

遺跡は砂林開集落の北西約200m、隣りの滑川市との境界を流れる郷川によって形成された舌状の河岸段丘に位置する。標高は約47mを測る。

付近一帯は水田及び畑地である。江戸時代後期の新田開発によって開拓された所で、地名もそこに由来する。遺跡の西約400mには県指定史跡、縄文時代後期の本江遺跡があるが、過去にこの地区で遺物が採集された記録はなく、今回の調査で新たに確認された遺跡である。

採集遺物は計52片で、縄文土器19片、弥生土器8片、須恵器1片、陶磁器24片であった。

縄文土器は、段丘西北端の畑地で採集されたが、いずれも小片で、磨滅が著しいため時期的な判別や器形判定はできなかった。

弥生土器は、段丘中央部を流れる手掘りの用水内、あるいはその付近の水田で採集した。残存状況はいずれも良好である（図版8の7～9・11・13・14）。

7は器台の受部から脚部付近のもので、内面にハケナデ調整を施す。

8は小型の鉢の口縁部で、くの字状に外反する。

9は壺あるいは甕の胴部で、外面がハケナデと磨きによる調整を施す。

11は甕の口縁部で、口唇部が丸い。内面、外面ともにハケナデ調整の後、磨きをかける。

13は甕の頸部で、内面、外面ともに横方向のハケナデ調整を施す。

14は器台で今回の調査の中で最とも良好な残存状況で採集された。段丘中央の用水内で採集したが、おそらくその部分に遺構が存在するものと思われる。形状は、皿状の受部と八の字状に開く脚部からなる。口唇部が複合口縁で、脚端部が直立し一条の沈線が見られる。調整は内面、外面ともに、ハケナデとケズリで調整し、その後、全体に磨きをかけた緻密な作りである。弥生時代後期最終末のものと考えられる。

須恵器片は1片を採集した（図版8の12）。杯蓋で、端部はいずれも欠損している。全体に焼が悪く、赤褐色を呈する。調整は、外面がヘラケズリで、内面はナデ調整を施す。

陶磁器片は台地全体で採集することができる（図版8の10・18～23）。

10は灰釉の皿の口縁部である。口唇部がやや肉厚である。

18・20は、越中瀬戸の碗で、鉄釉を施す。

19は灰釉が施された越中瀬戸の皿の底部で、削り出された高台を持つ。

21は、白磁で内面に漆で線描された文様を施す。

22は白磁である。小型で内面のみに釉を施す。紅皿であろうと考える。

23は染付の碗である。内面にぶどうの絵柄を施す。

以上であるが、段丘中央を流れる用水内は、長年の流水によって表土が洗い出され、黄色の地山面が露出している。この露出面には柱穴と考えられる堅穴が数多く確認され、遺構がかなり良好な状態で残存しているものと考えられる。

(2) 砂林開遺跡(図版19の2) 上市町砂林開

遺跡は砂林開集落の南東約500mの台地上に位置する。北東側は郷川により形成された黒川谷を見おろす。付近一帯は、水田及び畑地である。

これまで、工場や県立の薬用植物指導センター、県道拡幅などの工事に先立って、分布調査や試掘調査が行なわれているが、遺構は発見されておらず、遺跡の中心は北東部にあるものと考えられている。今回の調査はその跡づけをする形となった。遺跡の中心は、標高約60mを測るやや小高い丘状の部分である。

遺物は計46片で、縄文土器22片、陶磁器23片、須恵器1片を採集した。このうち縄文土器6片、陶磁器4片を図示した(図版8の1~6・15~17・24)

1は、深鉢の胴部で半隆起線に爪形文を施すものである。縄文時代中期中葉の天神山式土器であろう。

2・3は深鉢の胴部でともにL Rの縄文を施す。

4はやや大型の深鉢と考えられる。R Lの縄文を施すが、よく観察すると施文方向とは別にやや太い縄を押しつけ施文した跡が認められる。

5は深鉢で、半截竹管文により施文される。

6はR Lの縄文を施す。

15は越中瀬戸の碗で、黒色の鉄釉を施す。

16は越中瀬戸の碗の口縁部で、緑灰色の釉を施す。全体に貫入が見られる。

17は黒色の鉄釉を施した鉢の口縁部である。口唇部が内湾しやや肥厚する。いわゆる鉄鉢形のものかもしれない。

24は擂鉢の底部で鉄釉を施す。擂目は一部磨滅している。

(3) 野島遺跡(図版19の3) 上市町野島

遺跡は、上市川右岸の段丘上で、野島集落の南東に隣接している。標高は約100mを測る。段丘直下との比高差は約30mである。

ここは以前から遺跡の存在が確認されており『大昔の富山県』(1950年森秀雄)においても紹介されている。付近一帯は畑地で、一部道路の拡幅により削りとられた部分がある。この部分では切り通しとなった崖面に袋状ピットなどが観察され、良好な残存状況を示している。

遺物は計234片で、縄文土器221片、須恵器1片、陶磁器5片、石器7片を採集した(図版3の5~7・10~35、図版4の1~24)。以下遺物ごとに図版順で説明を加える。

(図版 3 の 12~35)

12は深鉢の口縁部である。口唇部が平面でやや内側にはり出している。半截竹管の痕を残す。

13は深鉢の口縁部で、口唇部が丸く調整されている。一条の沈線が口縁をめぐり、以下縄文を施す。縄文時代中期の古府式に比定できる。

14は鉢型の上器と考えられる。全面が赤褐色を呈し、火を受けたものと考えられる。口唇部は薄く、やや外反する。

15は深鉢の口縁で、口唇部が丸く、やや外反する。口縁周囲をなで、縄文が一部消されている。古府式に比定できると考える。

16・17は深鉢の上器の胴部で、はりつけの隆線に爪形文を施すものである。縄文時代前期福浦上層の土器に比定できる。

18・20・21・23は深鉢で口縁部に半隆起線文を施す。このうち21は、口唇部に爪形文が施されており、内面に一条の沈線がめぐる。縄文時代中期中葉の天神山式に比定できる。

19は深鉢の口縁部で、周囲に隆線をめぐらす。

22は無文の土器片であるが、内面にススの痕跡を残している。

24は半截竹管文を横走させ、その上に粘土紐の貼り付け痕を残す。縄文時代前期福浦上層の土器に比定できる。

25・27・29・30・32・33・34はいずれも R L の縄文を施す。

26は深鉢の胴部で縦にヘラ状工具による沈線を施す。縄文時代中期後葉串田新式の土器と考えられる。

28は、台付土器の台部との接合部である。外面に隆起線による楕円の文様を施す。

35は深鉢の胴部で隆起線による楕円区画と縄文により施文されている。

(図版 4 の 1 ~ 24)

1・3~5・12・14・15はいずれも深鉢胴部で縄文を施す。

2は隆起線により区画された内部にクシ描状の沈線を施す。

6は半隆起線を施す黒褐色の土器である。

7は沈線を横走させた文様を施す。

8は半隆起線にクシ書きを施したいわゆる葉脈状文で縄文時代中期後葉串田新式の土器と考えられる。

9は沈線による施文で一部に縄文が見られる。

10は縦走する半截竹管文を施す。

11は外面が黒褐色を呈する深鉢である。器面に沈線を蛇行させて施文している。縄文時代後期の岩幹野式の土器に比定できる。

13は深鉢の底部付近で、隆起線が縦走し、無文帯が残る。

16は鉢の底部付近で細かなクシ描文を施す。

17・18・20は底部で、わずかながら網代圧痕を残す。

19は底部付近でR Lの縄文を施す。

21は底部付近で半截竹管とL Rの縄文で施文される。

22・24はいずれも越中瀬戸の壺である。22は小型で鉄軸を施す。24は底部で、裏面に糸切り痕を残している。

23は珠洲焼で裏面に、あて具痕を残す。

石器は7片採集し、このうちの5点を図示した（図版3の5～7・10・11）。

5は凝灰岩質の自然石を剥離し、一部に刃部をつけた削器である。

6は凝灰岩質の削器である。

7は砂岩系の石材で、自然石をそのまま利用したと思われる砥石である。

10は砂岩系の凹石である。

11は砂岩系の石材の一部を打ち欠いて作られた石錐である。一部欠損しているが長さ約12cmの大型のものである。

#### (4) 永代遺跡（図版19の4）上市町野島下大門

遺跡は上市川右岸の段丘上で、野島遺跡の東約20mに位置する。標高は約110mで付近一帯は畠地である。ここは以前から遺物が採集できることが知られており、その数も多い。また1984年に用水工事に伴う発掘調査が実施されており、竪穴式住居4棟、それに伴う土塙3ヶ所、埋甕2ヶ所を検出している。今回の調査では、縄文土器479片、土師器18片、陶器1片、石器21片を採集した（図版5・6・7）。以下遺物ごとに図版順で説明を加える。

図版5の1～90は、いずれも縄文土器である。84・87を除いてすべて縄文時代中期の土器であると考えられる。

1～4・23～40はいずれも深鉢の口縁部である。

1は口縁がやや内湾し、2本の隆起線が平行にめぐり、無文帶を作り出す。

2・4は波状口縁の土器で口唇部が肥厚する。

3は口縁が丸く、隆起線が横走するものである。

23・28は口縁部がくの字状に外反するもので、隆起線が横走する。

26・27・29・30・36・38・39は口唇部が平らでやや内湾する土器である。このうち26は口唇部上面に沈線がめぐる。

33は隆起線に爪形文を施すもので縄文時代中期中葉の天神山式に比定される。

6・8・10・11・42～58・60～62・76は、深鉢の胴部で隆起線による施文が行なわれているものである。このうち42・44～46・54・61には爪形文が施文される天神山式土器に比定される。

7はヘラ状工具による施文で、隆帶・爪形文が付随するものであろう。

63～68・70～76・78～81・85・88・89・90は深鉢の胴部で縄文を施す。このうち63～66・75はR Lで、67・68・70～74・76・78～81・85・88・89・90はL Rで施文される。

84はいわゆるミミズばれ状の文様が施されており晩期の土器であろう。

87は、細粒の繩文を施す土器で胸部が張り出した鉢が想像される。後期の土器であろう。

(図版6の1~23)

1・2・4~10・12・14~19は、いずれも繩文の深鉢である。8・9・12はRL、1・2・4~7・10・14~19はLRの施文を行う。

13は半截竹管文により施文する。

20・21は深鉢の底部である。このうち21はわずかに網代压痕が観察される。

22は無文である。すかし穴があけられており、台付き土器の脚部と考えられる。

23は浅鉢の底部付近と考えられる。

(図版6の24~29)

24は花崗岩質の凹石である。長さ12cm、幅8.5cm、重さ1.05kgである。

25・26は花崗岩質のたたき石である。25は長さ8cm、幅6.5cm重さ470g、26は長さ11cm、幅8cm、重さ720gである。

27は砂岩質の砥石である。

28は蛇紋岩系の石材の磨製石斧である。周囲がかなり磨滅しており、後にタクキ石に転用されたものと考えられる。

29は凝灰岩質の打製石斧である。欠損しているが長さ約20cmのものと考えられる。

(図版7の1~10)

1・10は砂岩の石皿である。このうち10は両面に使用痕が認められる。

2~4はいずれも花崗岩のたたき石である。2は長さ10cm、幅7cm、重さ630g、3は長さ11cm幅10cm、重さ1.2kg、4は長さ7.5cm、幅6.5cm、重さ370gである。

5~8は凝灰岩質の打製石斧である。5・6・7はいずれも欠損している。8は長さ12.5cmのバチ形のものである。

9は白色の蛇紋岩系の石材の磨製石斧である。

(5) 野島大門遺跡 (図版19の5) 上市町野島大門

遺跡は上市川右岸の段丘上で永代遺跡の東約100mに位置する。標高は約130mで、付近一帯は畑地である。近くに曹洞宗の寺院、立山寺があり、その参道の「とがの並木」は県指定の天然記念物である。ここは以前から遺物が採集されているが、分散的で、その性格、時期については不明な点が多い。

今回の調査では、繩文土器8片、陶磁器3片、石器4片を採集したが、前記のとおり分散的で時期の判断を行なえるだけの資料を欠く (図版3の1~4・8・9)。

1は隆起線を持つ土器である。

2は碗で、緑灰色の釉を施す。瀬戸・美濃系陶器と考えられる。

3・4は凝灰岩質の打製石斧である。いずれも欠損品であるが、長さ10cm、幅6cmでほぼ同じ大きさのものと考えられる。

8は砂岩質の磨製石斧である。欠損しており、残存部で長さ7cm、幅7cmである。

9は砂岩質の砥石である。欠損品であるが、一部に凹を残しており、後に凹石として転用された可能性がある。

(6) 水代野遺跡(図版19の6) 上市町水代野

遺跡は永代遺跡の南約200m、片地集落の東約100mの台地に位置している。標高は約110mで、背後に丘陵をひかえている。

この遺跡は今回初めて確認された遺跡である。遺物は縄文土器144片、上師器13片、須恵器4片、陶磁器8片、石器14片である(図版4の25~50)。

25は波状口縁の土器である。器面にわずかながら繩文が残る。

26・27・30・33は、いわゆるメガネ状隆起帯・工字文風の文様を持つもので、縄文晩期に位置づけられよう。このうち26は微隆起線による施文が行なわれている。30は一部にベンガラ痕が見える。

29は深鉢の底部で、網代圧痕を残す。

28・51は土師器で内面、外面ともにハケナデ調整を施す。

34~37は珠州焼である。いずれも、珠州II期のものと考えられる。

38~43はいずれも越中瀬戸である。38は鉄釉の壺の底部で、糸切り痕を残す。39は内面外面とも鉄釉を施す壺の口縁である。40は内面外面とも鉄釉を施す。燭台の一部である。41・42は鉄釉の壺、43は壺の底部である。

石器はすべて縄文時代のものであると考えられる。

44~48は、1つの石材から剥離されたものと考えられる。石材は輝石安山岩と考えられる。

44・45は石鎌で、44は有茎、45は無茎のものである。46は剝片の一部に刃部を持つ。47・48はいわゆるイーエス・エスキューである。

49・50は、砂岩質の磨製石斧で、いずれも欠損している。

(7) 片地揚場遺跡(図版19の7) 上市町片地揚場

遺跡は片地集落の東約100mの丘陵上に位置する。標高は約130mを測る。遺跡の南側には海水性二枚貝の化石の散布地である片地谷を見おろす。付近一帯は畑地、果樹園である。

これまでにこの地で遺物が集収された記録はなく、今回の調査で新たに確認された遺跡である。

遺物は、縄文土器52片、石器2片を採集した(図版8の45~58)。

縄文土器はいずれも小片で時期判断の材料に欠くが、48・50・53に見られる半截竹管文及び半隆起線などから縄文時代中期が主要な時期であると考えたい。

45・47・52~56はいずれもRLの繩文が施文されている。

46は越中瀬戸で、鉄軸の擂鉢である。

57は黒曜石の剝片で一部刃が残る。

58は無茎の石錐で、石質は輝石安山岩である。長さ2.5cm、幅1.5cmの極めて小さなものが、作りは精細で、やや厚みがある。

(8) 松原野遺跡（図版19の8）上市町松原野

遺跡は、片地揚場遺跡の北約700mの舌状に張り出した丘陵上に位置する。

標高は約130mを測る。ここからは遠く富山湾まで一望できる。付近一帯は畠地である。

遺物は、縄文土器74片、土師器1片、須恵器1片、陶磁器12片を採集した（図版8の26・30～34・37～42）。

26・40・41はLRの縄文を施す。

30・31・33・38は隆起線による施文がある。このうち30・33は口縁部である。

32は半隆起線に爪形文を施すもので縄文時代中期中葉の土器であろう。

34は、隆起線により形づくられたうず巻状の文様である。

37は深鉢の口縁部付近で、くの字状に内湾する。

39は深鉢の口縁部である。半載竹管文により、格子目状の文様を形づくる。

(9) 片地遺跡（図版19の9）上市町片地

遺跡は片地集落の北約200mに位置する。付近一帯は水田で、標高は約110mを測る。

ここは以前より遺物が採集されているが、今回の調査では縄文土器12片、陶磁器3片を採集した。縄文土器はいずれも小片で、磨滅がはげしく時期的判断の資料を欠く。ここでは陶磁器片3片を図示した（図版9の1～3）。

1は緑色の釉がかった陶器で、朝顔状に開く口縁を持つ壺と考えられる。

2は燭台の底部である。底部の中心に固定用の穴があけられている。

3は内面に布目痕を残したもので、上人形の一部と考えられる。

(10) 黒川古墳（図版19の10）上市町黒川

遺跡は黒川集落の東約200mの山中に位置する。眼下に町の北側を流れる郷川を望む標高約50mの地である。付近一帯は雑木林である。

墳丘は全部で7ヶ所確認できた。形状はいずれも円墳で、群をなして存在する。規模は最大のもので径約12m、最小のもので径約6mで高さは2m前後である。付近には人頭大の石が見られる。周溝は明確ではないが、墳丘と墳丘の間に窪みが見られ、これが周溝ではないかと考えられる。

遺物は採集できず明確な年代を把握する資料を欠くが、古墳時代末のものではなかろうか。

(11) 松原野新遺跡（図版19の11）上市町松原野新

遺跡は松原野遺跡の東約200mの丘陵上に位置する。標高は約150mで、付近一帯は、雑木林、畠地である。

遺物は以前から採集できることが知られているが内容は明確ではない。これは、昭和初期の開墾によりかなりの部分が消滅したためと見られる。また、付近の畠地は耕作が行なわれておらず荒れるにまかせる状態で調査できない部分が多い。図では旧来の遺跡範囲のみを示した。

今回の調査では縄文土器4片を採集した（図版8の35・36・43・44）。

35はRLの縄文が施文されている。

36・37はLRの縄文が施文されている。

44は深鉢の口縁部付近で半截竹管文が見られる。

(12) 稲村山城跡（図版19の20）上市町稲村城山

城跡は上市川を見おろす標高348mの城山の山頂に位置する。山頂からは遠く富山湾・能登半島まで遠望できる。昭和34年3月12日付け上市町指定文化財（史跡）となっている。

この城は、15世紀から16世紀頃まで中新川一帯を領した中世豪族、土肥氏の城で、滑川市堀江にあった房城堀江城の奥城であったといわれている。

山頂は東西約40m、南北約30mの平坦面を持ち郭を形づくりしている。周囲は40°から60°の急峻な崖で自然の要害を形成する。また山頂には深さ約2mほどの堅抗があり、雨水等を留めた井戸と考えられる。

(13) 折戸遺跡（図版20の1）上市町折戸

遺跡は折戸集落の北端に位置する。標高は約350mを測る。付近一帯は宅地・畠地である。ここは以前から遺物の散布地として知られているが、現在まであまり良好な資料は採集されていない。今回の調査では縄文土器2片、土師器1片、陶磁器12片を採集したが、このうち4片を図示した（図版10の23～26）。

26は縄文土器でLR施文がある。

23・24は染付である。このうち24は内面に松の枝と思われる絵柄が見える。

25は越中瀬戸の碗ではないかと考える。内外面ともに、ややすくすんだ乳白色の釉を施す。

(14) 中村横穴群（図版20の2）上市町中村

遺跡は中村集落の東側背後の山中に位置する。標高約380mを測る。付近一帯は山林である。

横穴は計4ヵ所確認できた。1ヵ所を除きほぼ同一等高線上に築かれている。いずれも崩れ落ちており構造を確認することはできなかったが、規模は長さ約7m、幅約2mの縦長のものであることが確認できた。

「富山県遺跡地図」においては古墳時代となっているが、現在確認した限り、それを立証する資料は採集できなかった。

(15) 千石山城跡（図版20の3）上市町千石

城跡は早月川と千石谷を見おろす標高757mの蓬沢山の稜線上に位置する。前述の稲村山城から直線で約2.5km東側に位置している。

山頂部は東西約40m、南北約55mの平坦面を持つ。稜線上では3ヵ所の空塹を確認した。

この城も土肥氏の奥城の1つと考えられるが、早月川の下流約7kmに、下新川の豪族、椎名氏の城である松倉城があり、椎名氏への牽制のための城であったのかもしれない。また早月谷一帯は中世末に、金山が発見されており、その利権を両者で争ったことも想像できる。

#### ⑩ その他

遺跡として設定した地区以外でも遺物が採集されている（図版9の4～30、図版10の1～22、27～34）。

図版9の4～30は主に広野地区的採集遺物である。遺物は越中瀬戸、染付などであり、蛇の目凹高台の8、見込みに蛇の目輪ハギが見られる10などに代表されるように18世紀中頃の遺物が多い。

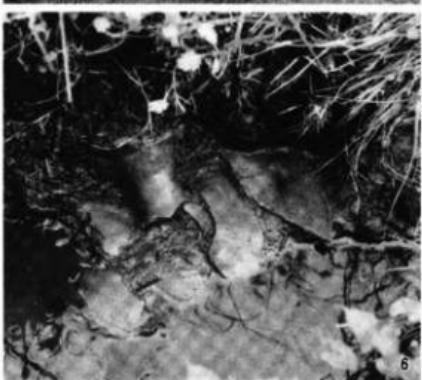
これは江戸時代の新田開発によりこの地区が開かれたことに起因すると考えられる。

図版10は、早月谷の各所で採集したものである。越中瀬戸、染付がやはり多く、広野とほぼ同時期と考えられる。これは18世紀に全盛期を迎える下田金山（図版20のロー3）に伴うものと考えられる。

## 参考文献

- 1 金沢市教育委員会「金沢市古府遺跡第4・5次調査報告」1974年。
- 2 上市町「上市町誌」1970年。
- 3 上市町教育委員会「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編」1982年。
- 4 上市町教育委員会「弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要」1985年。
- 5 上市町教育委員会「永代遺跡緊急発掘調査概要」1985年。
- 6 小島俊彰「北陸の繩文時代中期の編牟一戦後の研究史と現状ー」『大境』第5号、1974年。
- 7 大門町教育委員会「串田新遺跡」II、大門町埋蔵文化財調査報告第2集、1981年。
- 8 大門町教育委員会「串田新遺跡」IV、大門町埋蔵文化財調査報告第4集、1982年。
- 9 高岡徹「富山県」「日本城郭大系」7新人物往来社、1980年。
- 10 高岡徹「富山県上市町柿沢城と國人土肥氏の城館配置」「かんとりい」No6、越中の歴史と文化を考える会、1982年。
- 11 立山町教育委員会「立山町史」上巻、1977年。
- 12 立山町教育委員会「白岩藪ノ上遺跡・吉峰遺跡」、富山県立山町埋蔵文化財緊急発掘調査概要、1981年。
- 13 立山町教育委員会「富山県立山町総合公園内野沢孤幅遺跡緊急発掘調査概要」I、1983年。
- 14 立山町教育委員会「富山県立山町総合公園内野沢孤幅遺跡発掘調査概要」II、1985年。
- 15 立山町教育委員会「立山町埋蔵文化財分布調査報告II」1987年。
- 16 富山県「富山県史」考古編、1972年。

- 17 富山県教育委員会「極楽寺遺跡発掘調査報告書」1965年。
- 18 富山県教育委員会「富山県埋蔵文化財調査報告書」II、1972年。
- 19 富山県教育委員会「富山県大門町串川新遺跡発掘調査概報」1973年。
- 20 富山県教育委員会「富山県遺跡地図」1972年。
- 21 富山県教育委員会「富山県立山町岩崎野遺跡緊急発掘調査概要」1976年。
- 22 富山県教育委員会・魚津市教育委員会「天神山遺跡調査報告書」1959年。
- 23 藤田富士大「富山』、日本の古代遺跡13、1983年。
- 24 森 秀雄「大昔の富山県」1950年。
- 25 安田良栄「富山県立山町岩崎野遺跡の土器文様」1963年。
- 26 吉岡康暢「加賀・珠洲」『世界陶磁全集』3日本中巣、1977年。



1. 広野地区  
2. 広野より本江造跡遠景  
3. 永代野地区

4. 広野新地区  
5. 砂林開北遺跡  
6. 砂林開北遺跡器台露出状況



1



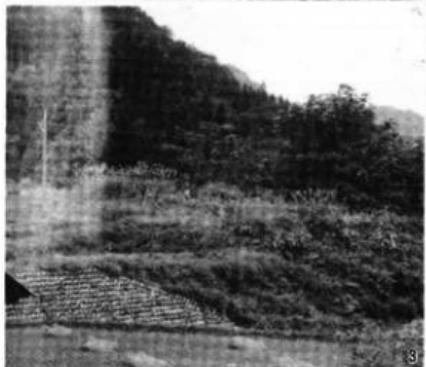
4



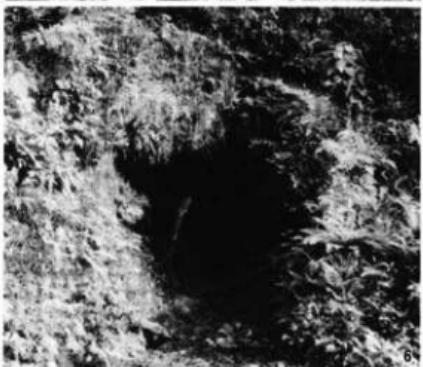
2



5

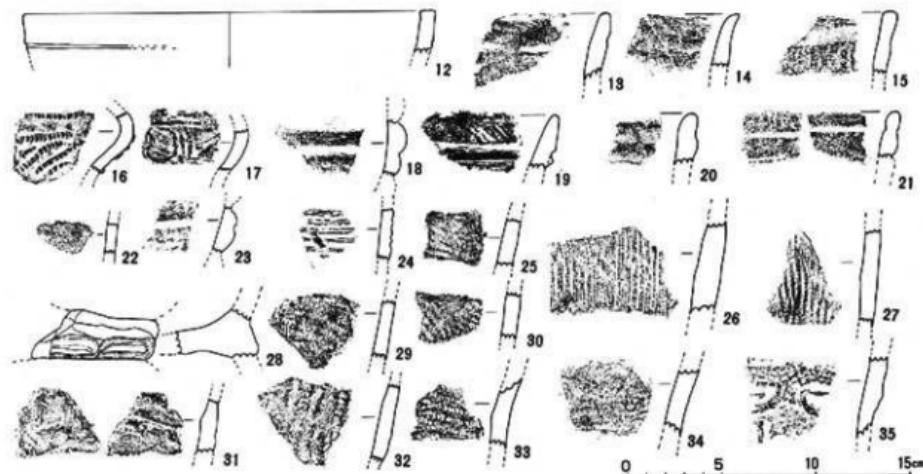
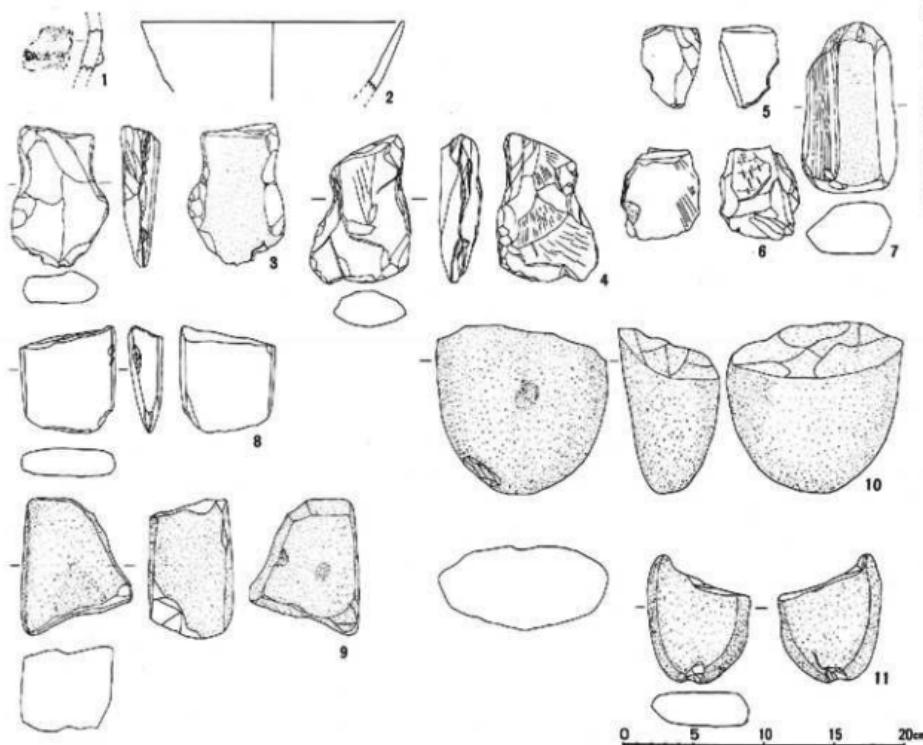


3



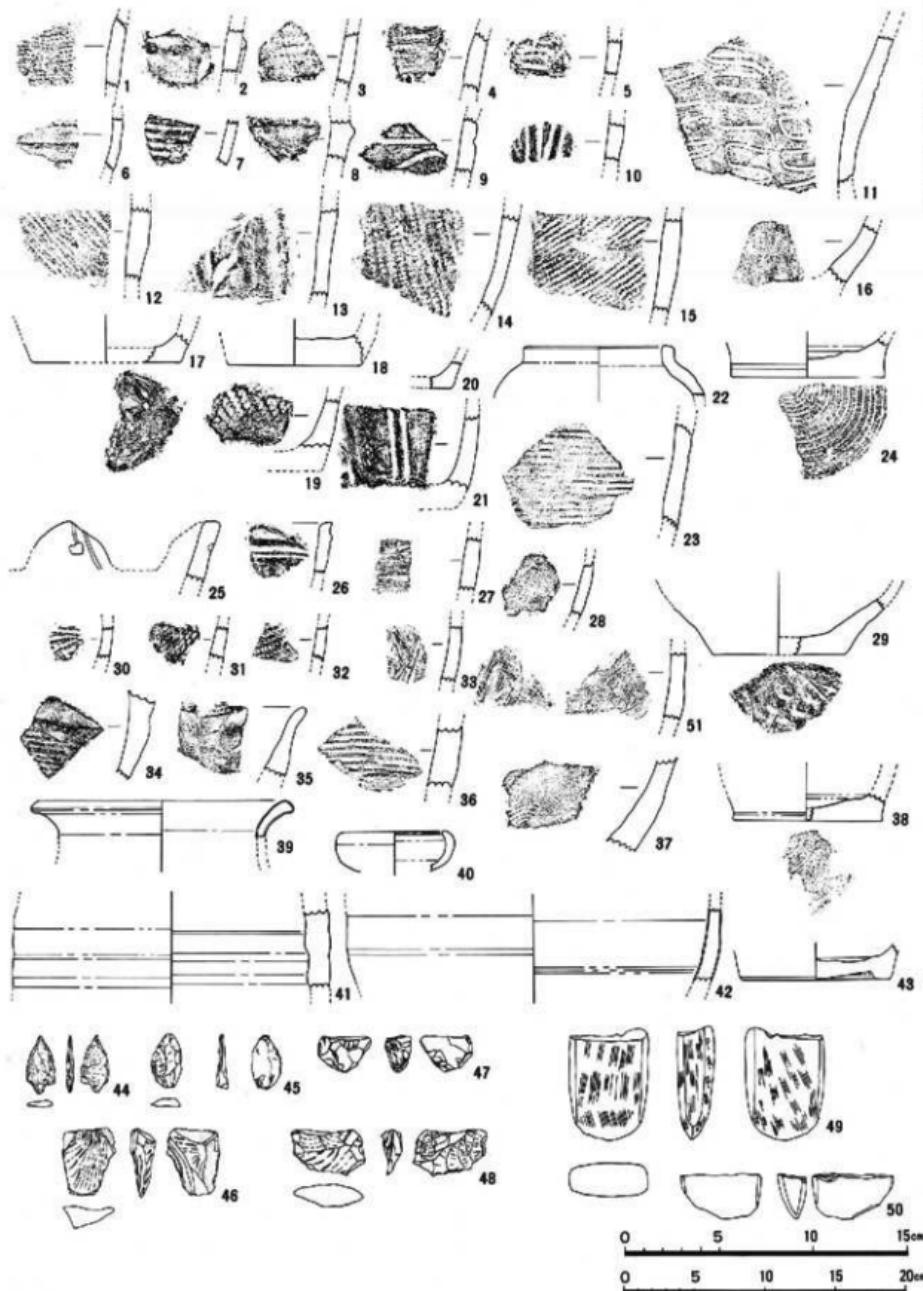
6

1. 黒川地区  
2. 黒川古墳群  
3. 中村地区  
4. 中村横穴遠景  
5. 中村横穴跡  
6. 下田金山鉱口



縄文土器、石器、陶器

(1 ~ 4・8・9 : 野島大門遺跡, 5 ~ 7・10~35 : 野島遺跡, 1・2・12~35 : 縮尺1/3,  
3~11 : 縮尺1/4, 図版11参照)

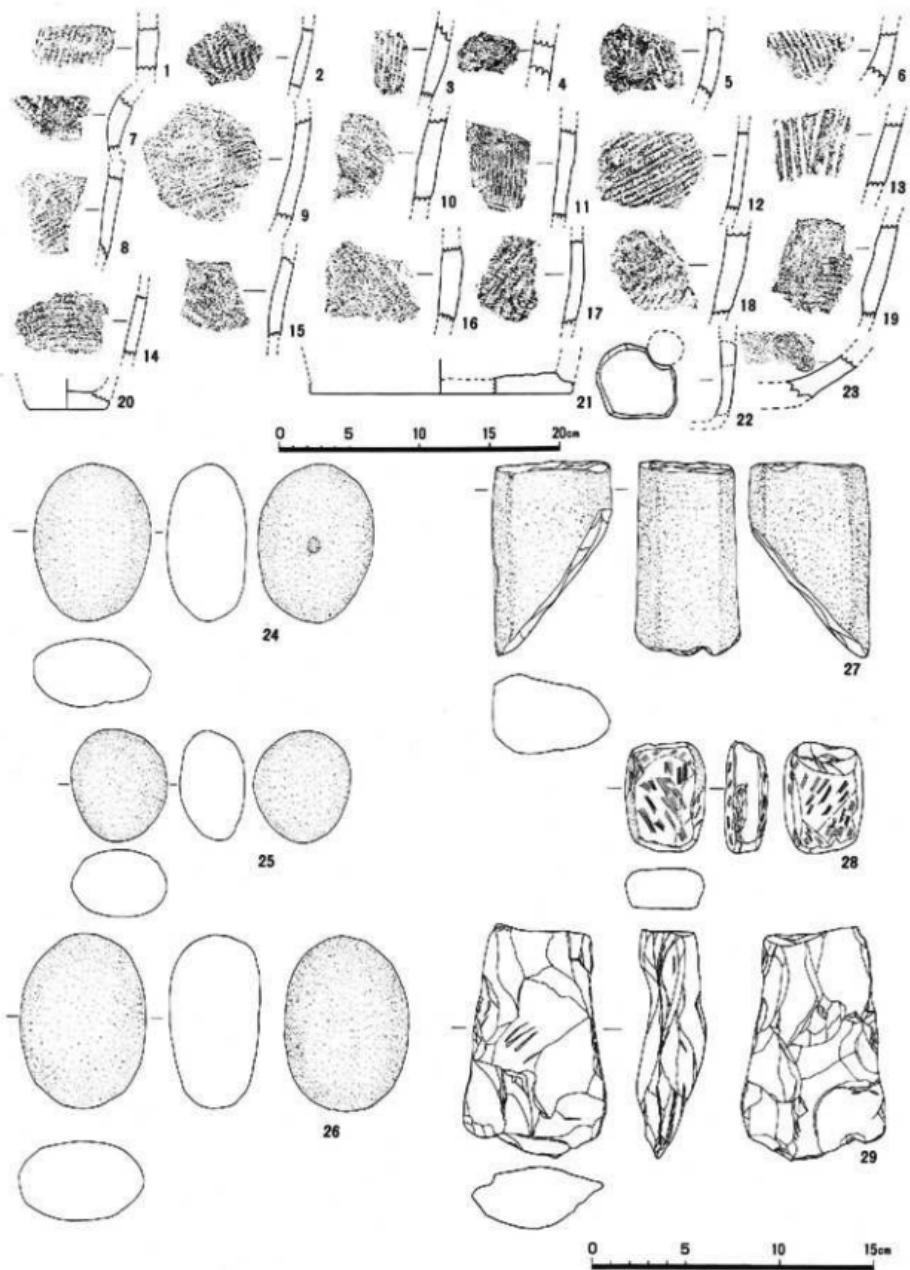


縄文土器・石器、須恵器、陶器

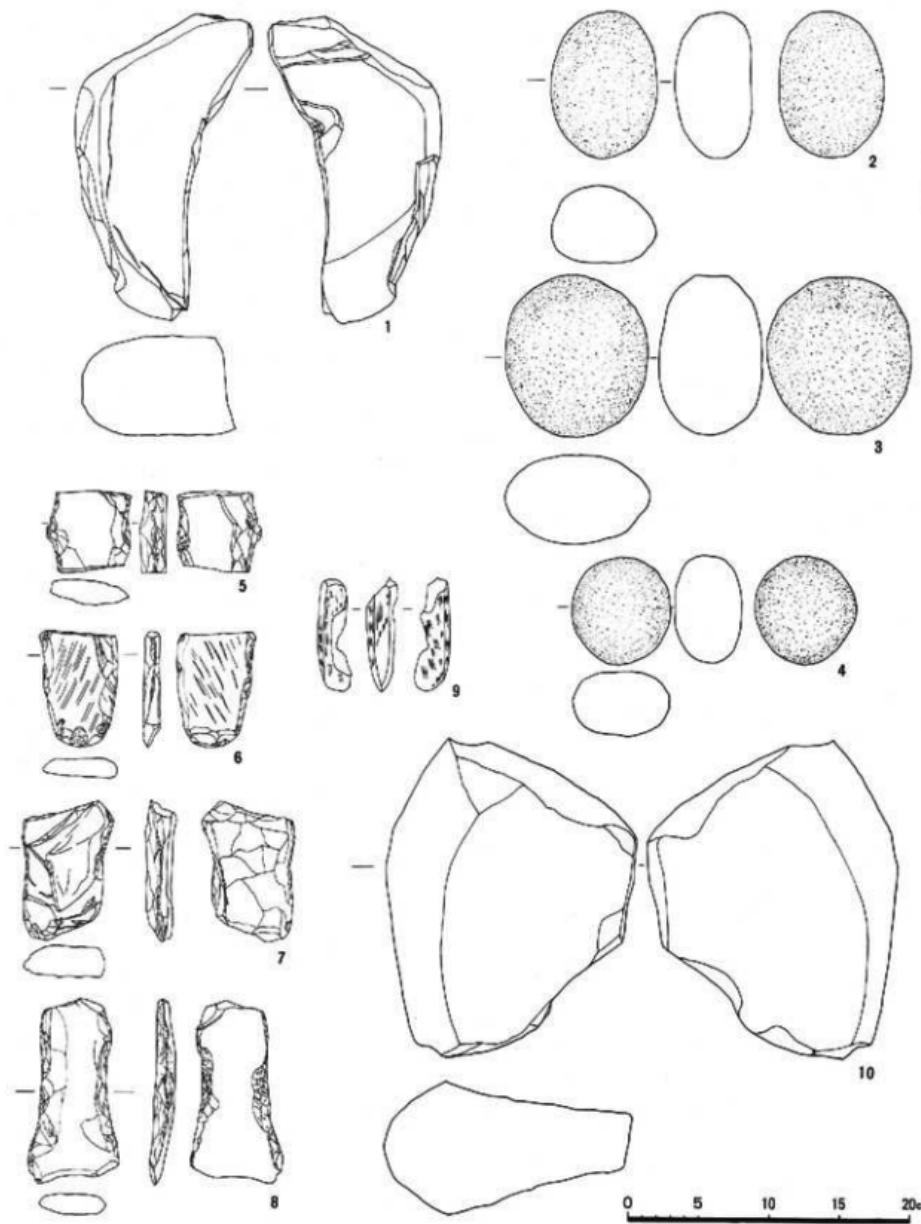
(1~24:野島遺跡、25~50:水代野遺跡、1~28:縮尺1/3、49:縮尺1/4、図版12参照)



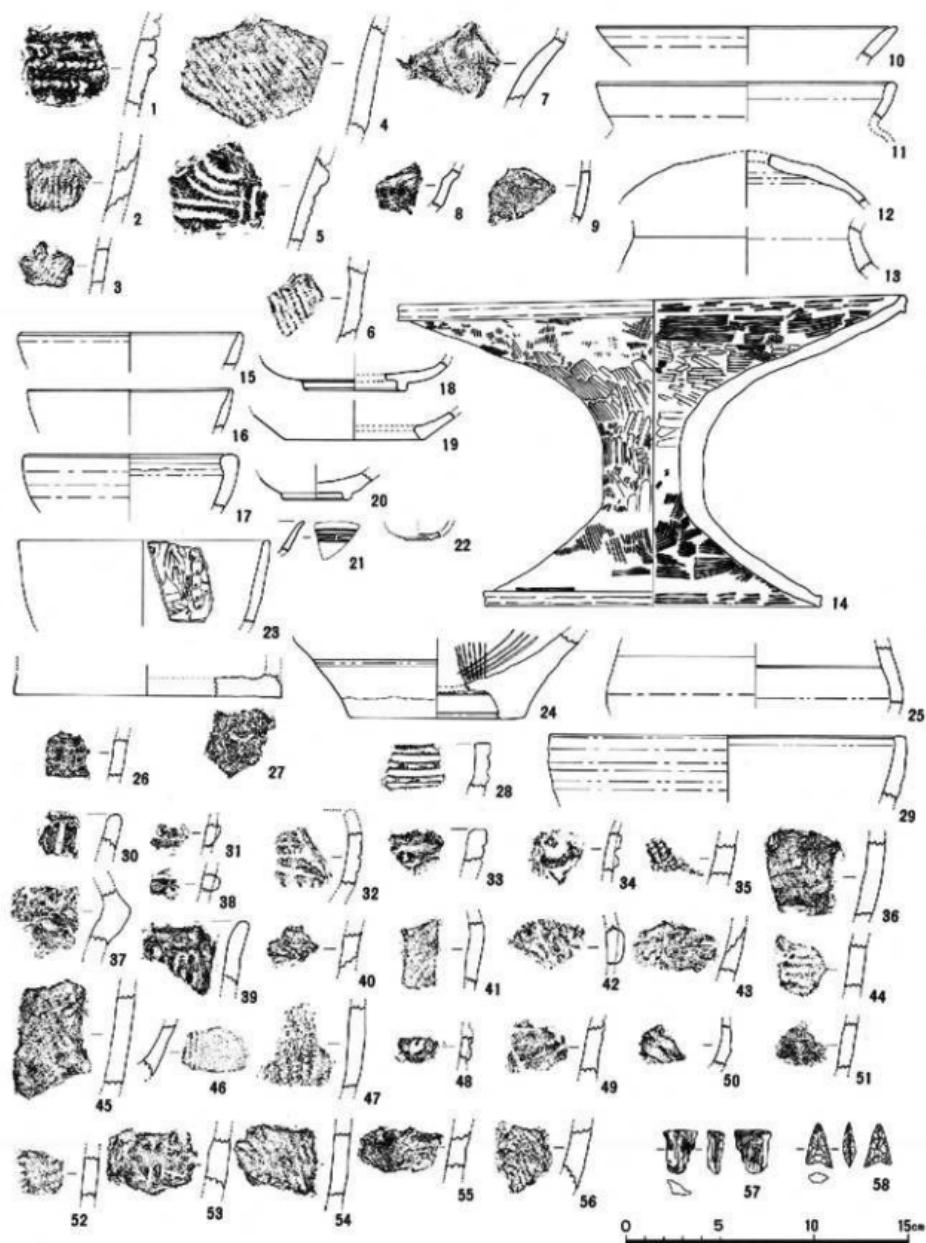
縄文土器  
(1~90水代遺跡、縮尺1/3、図版13参照)



縄文土器・石器  
(永代遺跡、1~23:縮尺1/3、23~29:縮尺1/4、図版14参照)

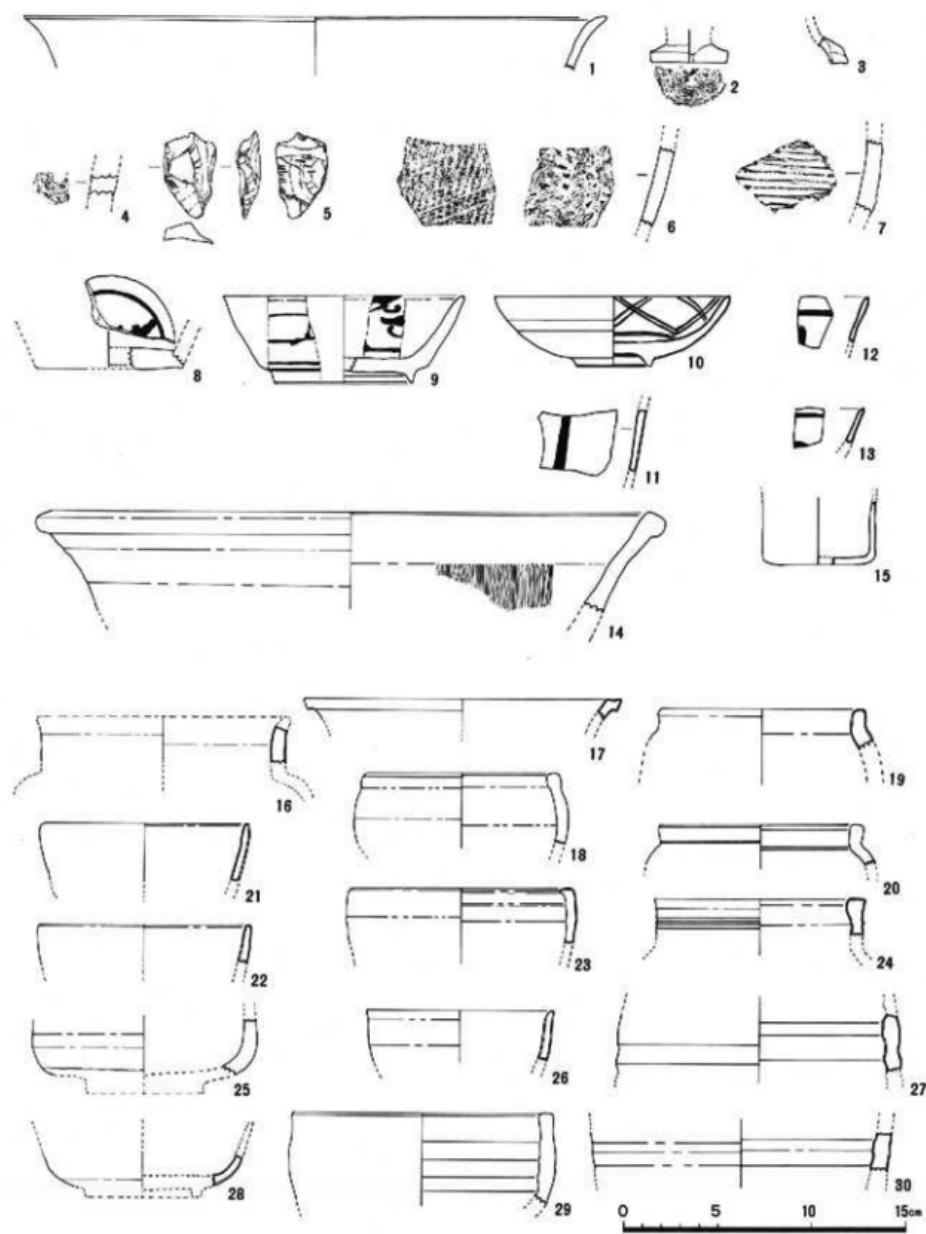


縄文石器  
(永代遺跡、縮尺1/4、図版15参照)



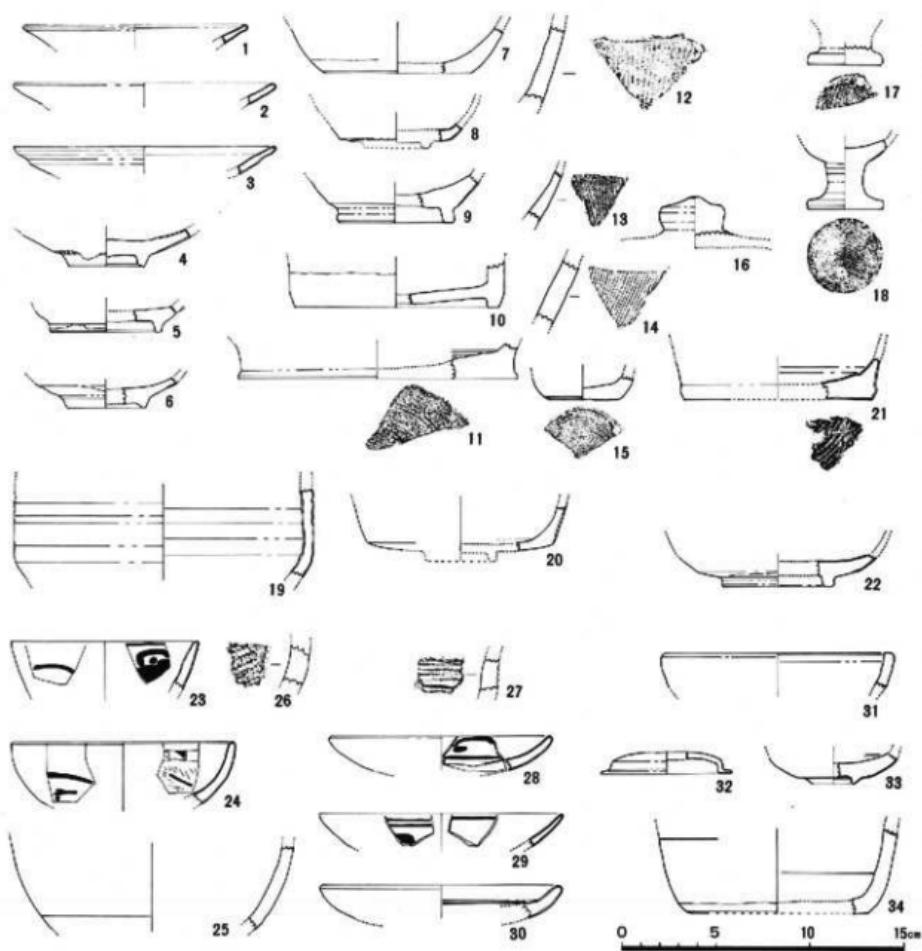
縄文土器・石器・弥生土器・陶磁器

(1~6・15~17: 砂林開道跡, 7~14・18~23・25: 砂林開北遺跡, 26・30~34・37~42: 松原野遺跡,  
35・36・43・44: 松原野新遺跡, 45~58: 片地揚場遺跡, 27・28・29イー4地点, 図版16参照)



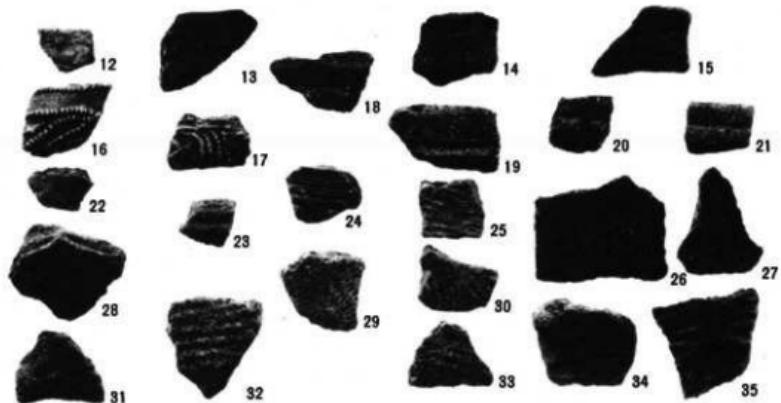
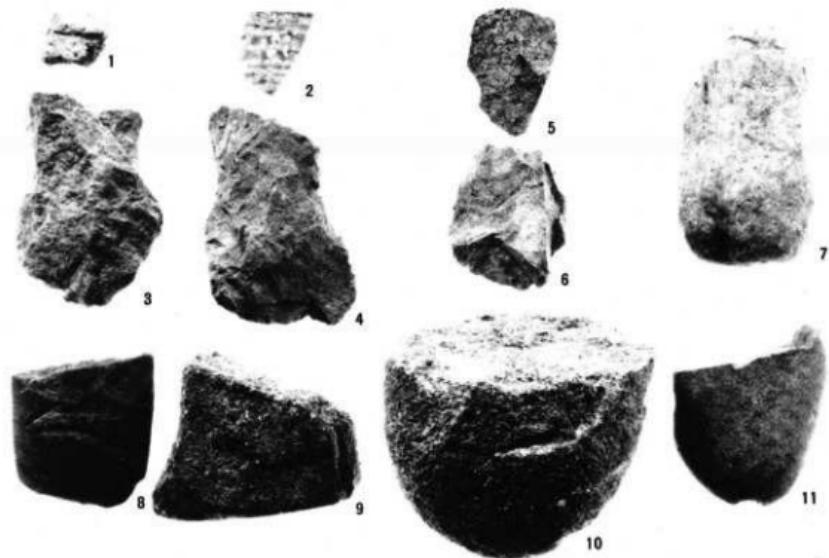
縄文土器、須恵器、陶磁器

(1~3:片地遺跡, 4・5:I-1地区, 6・7:I-5地区, 8~15:I-10地区, 16~20:I-3地区,  
21~23:I-4地区, 24~30:I-6地区, 縮尺1/3 図版17参照)

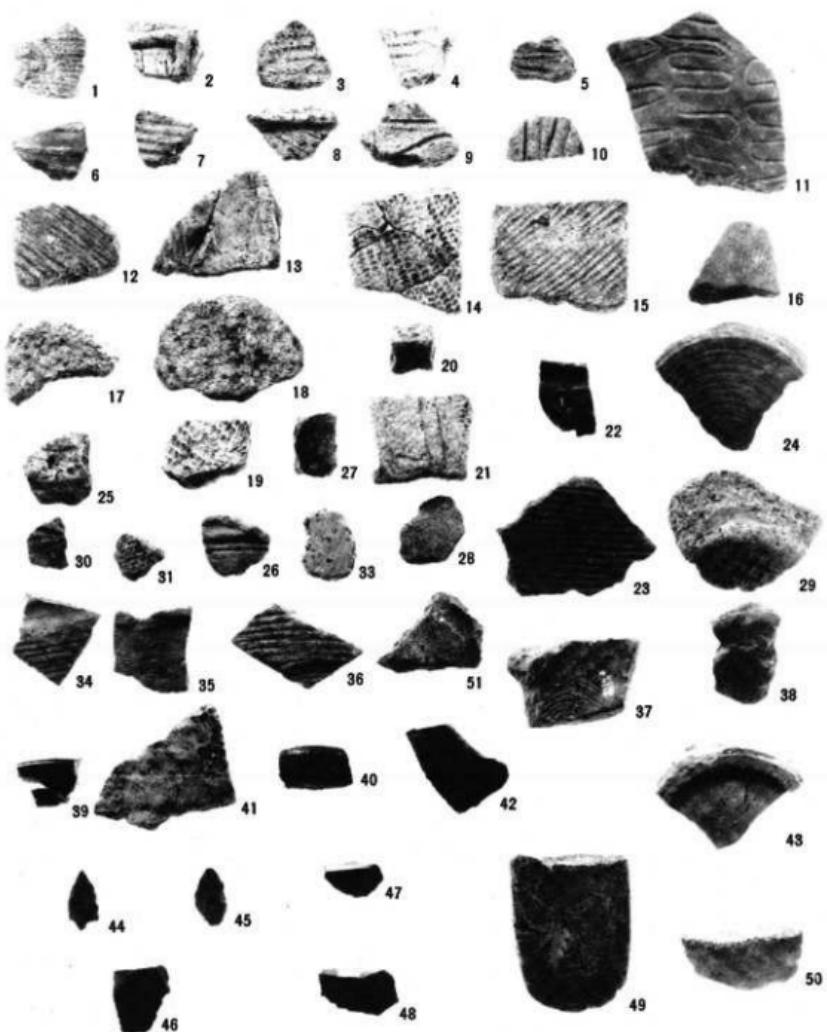


縄文土器、須恵器、陶磁器

(1~14:イ-6地点, 15~17:イ-7地点, 18~21:イ-9地点, 22:イ-10地点, 23~26:折戸道路, ロ:ロ-2地点, 28~32:ロ-3地点, 33・34:ロ-4地点。縮尺1/3 図版18参照)



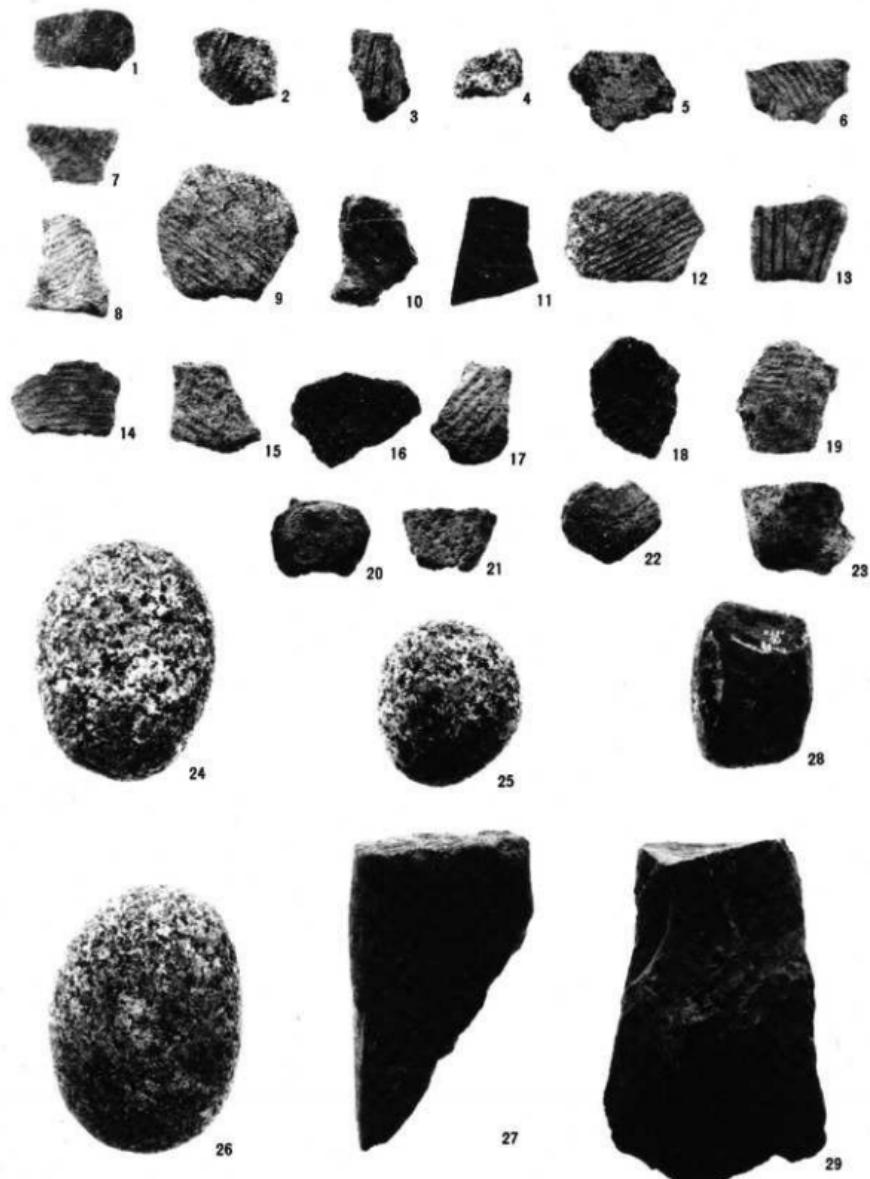
縄文土器・石器、陶器 (図版3参照)



縄文土器・石器、須恵器、陶器（図版4参照）



縄文土器 (図版5 参照)



繩文土器・石器 (図版6 参照)



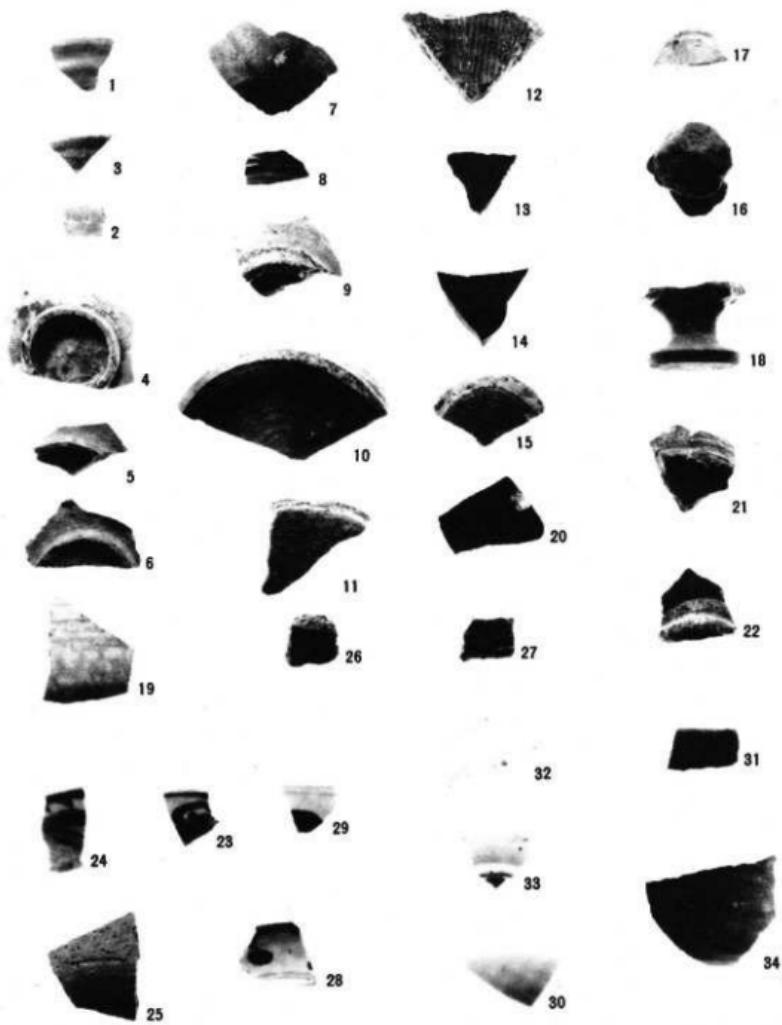
縄文石器（図版7参照）



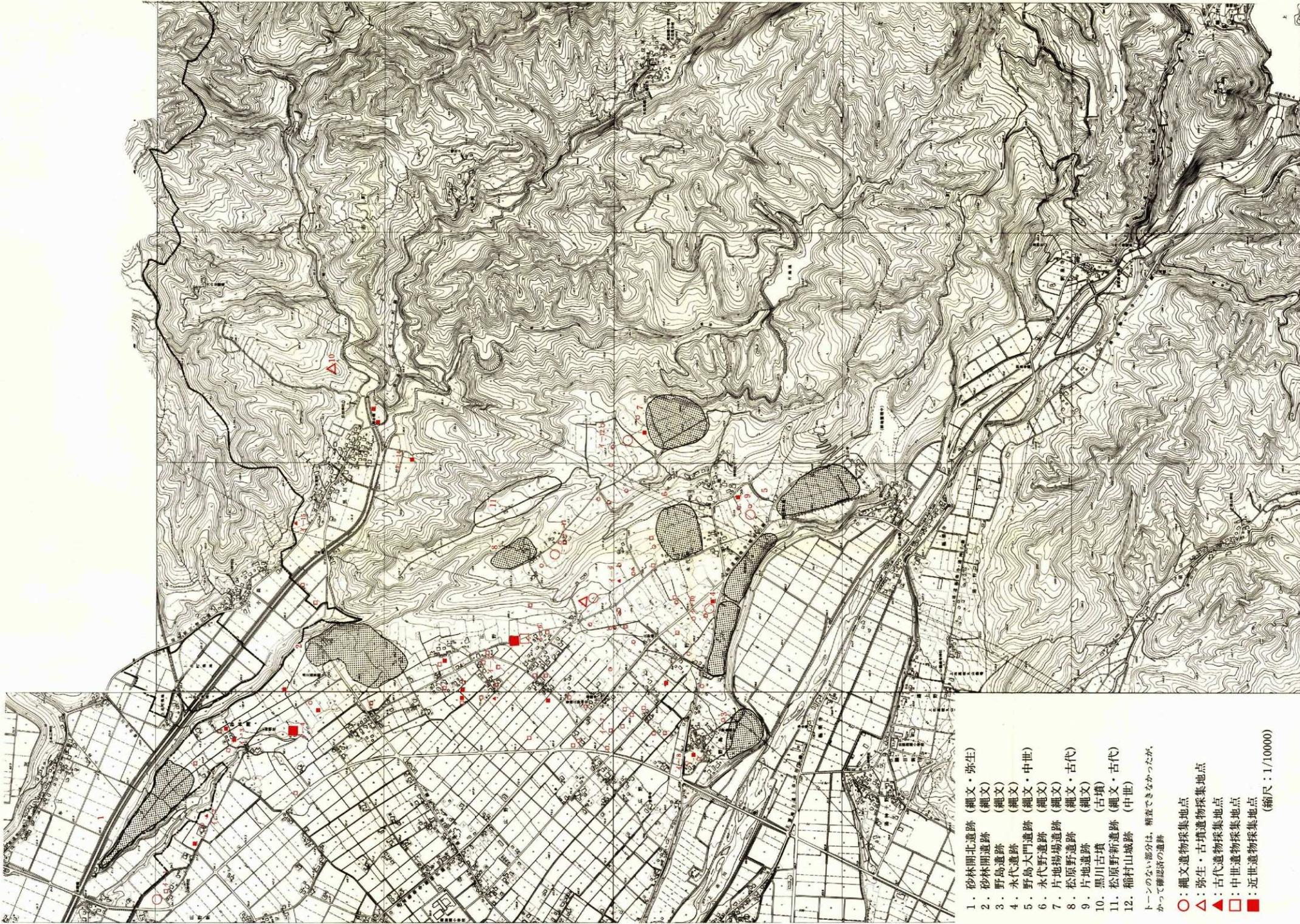
縄文土器・石器、弥生土器、陶磁器（図版8参照）

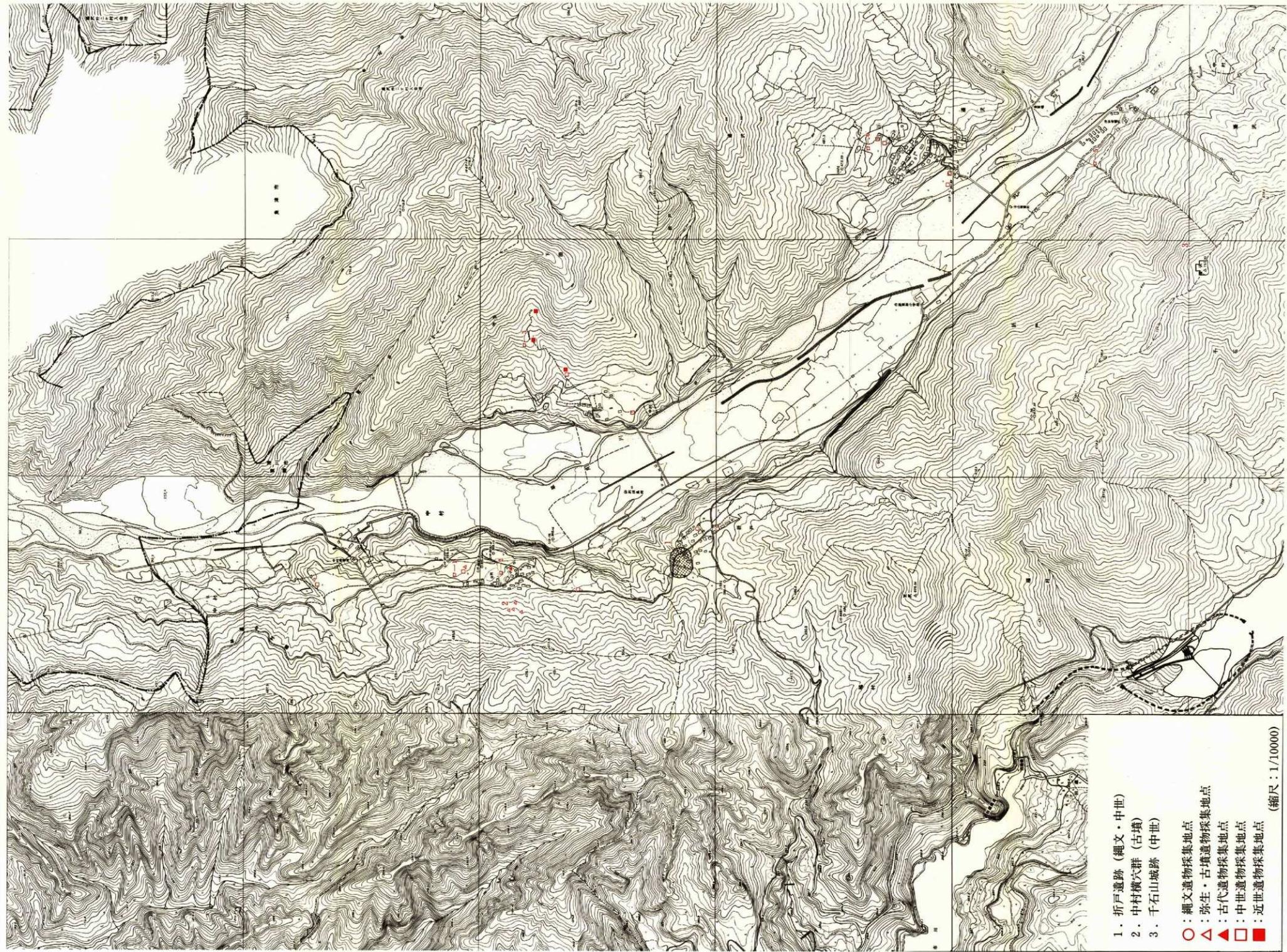


縄文土器、須恵器、陶磁器 (図版 9 参照)



縄文土器、須恵器、陶磁器（図版10参照）





1989年3月25日 印刷

1989年3月31日 発行

## 上市町埋蔵文化財分布調査報告 I

編集発行 上市町教育委員会

印刷 チュエツ

